ロクでなし魔術講師と禁忌教典 Re：venge

名前のない怪物

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

……これは、愚者の物語ではない。

亡き王女の物語でもない。

白い猫の物語でもなく。

ましてや《永遠者》の物語でもない。

――これは、人の物語。

目次

序章
プロローグ1 ―― 1
プロローグ2 ―― 21
プロローグ3 ―― 39

序章
プロローグ1

アルザーノ帝国、帝都からさほど離れていない町。
帝都には劣るが帝都からも行商が来るのでそれなりに発展している。
昼間は行商や行きかう人々の会話がその町を活気づけている。
――しかし今は。
太陽が真上に位置する時間帯にも関わらず
行商の馬車も。
人々の賑わいもなく。
音と呼べるものは自然音である風の音だけ。
環境音のみとなったその町は、以前の活気との差によってどことなく不気味な雰囲気を放っていた。
しかしある一か所だけ、自然音ではない人口の音が響いていた。

――金属音。呻き。銃声。爆発。

これらの音の中心はなんの変哲もない裏路地で響いていた。
その路地には大量の血糊に肉塊…ヒトであったモノが積みあがっていた。
それが路地の入口からずっと奥まで続いている。
それによって酷く鉄の匂いが充満している。
硝煙と火薬の匂いとナニカが焦げた匂いとも混ざり合い、常人には耐えられない匂いと化していた。
そしてその路地には場に似合わぬ貴族的な装飾の軍服……帝国宮廷魔導師団の制服を着た
三人の男女が一般市民〝だった〟モノに対してそれぞれの武器で応戦していた。
「くそ！　キリがないぞ！　いい加減弾薬と魔力も切れそうだ……ヴァイスと白犬は？」
黒髪で少し長めの髪を後ろで縛っていて敵に愛銃の魔銃《ペネトレイター》を構える男
グレン＝レーダスは敵の数の多さに顔をしかめ毒づきながら他の二人の戦力を訪ね

る。

「俺ももうそんなに魔力残ってないぞ……俺の弾は魔術使ってないやつには銃弾としてすら効果を為さないからこいつらには使えないしな……」

グレンの問いに眉を八の字に下げながらグレンと同じ銃、《ペネトレイター》に込められた自分の個性と叡智を寄せ集めて作成された弾丸を見てそう言うのはグレンにヴァイスと呼ばれた今この場に似合わない透き通る銀糸のような短髪の男だ。

「私も厳しいかな……もう、これじゃジリ貧だよ～……」

ヴァイスの発言に便乗するように言うのは現在紅一点のセラと呼ばれた女性。

穢れを知らない白い髪と同じく透き通るような白い肌。

その白い柔肌には赤い塗料で描かれた民族的な模様が描かれている。

「ウゥウアアアア……」

ヒトだったモノの呻き声を聞き、三人は愚痴を止め正面を向き大量の敵を見据える。

が、しかし敵は正面からだけではなかった。

「……ッ!?　二人とも上だ!」

数多の戦場によって培われた戦闘勘によって頭上に違和感と危機感を感じたヴァイスは

隣にいたセラを自分の腕の中に抱きながら自分の足裏に魔力を集中させた後

一気に放出しその推進力で後方に下がった。
「わっ、シロ君!?」
突然抱きかかえられたセラは困惑の表情で見るがヴァイスの顔を見て
どういう状況になったのか気付き、顔を引き締めた。
「……囲まれたな」
ヴァイスは自分の周りを見渡しながら目を鋭くする。
その直後、入ってきた路地の通路から新たな敵が現れ、退路を塞がれてしまう。
「これはキビシイかも……」
「グレンとも分断されたし……グレン、聞こえるか?」
八方を塞がれて内心舌打ちをしたヴァイスは分断されたグレンと一緒にセリカから渡された通信用の魔道具である半割れの宝石に呼びかける。
返事はすぐに帰ってきた。
『ヴァイス!?　無事なのか!?』
「なんとか……セラも無事だ」
グレンの慌てた声が通信魔道具から響く。
向こうから安堵の声が聞こえるが、今はそんな場合ではない。
ヴァイスは真剣な面持ちでグレンに話を切り出す。

「グレン、お前はまだ囲まれてないよな？」
『あ、あぁ』
グレンは突然の質問に困惑しながらも答える。
そうか、とヴァイスは呟いて一拍置いて、また口を開いた。
「お前だけでも先に逃げろ」
『なっ……馬鹿言ってんじゃねぇぞ!?』
ヴァイスの言葉にグレンは怒鳴って一蹴した。
「こっちは大真面目だ。馬鹿はお前だ、状況を考えろ」
『っ……なんで俺だけなんだよ!?　お前らなら俺を置いて脱出できるだろうがっ！』
冷静に返されたグレンは声を詰まらせながら怒鳴った。
その声に顔を少し暗くしながらヴァイスは首を振った。
「……無理だ。俺の魔力放出は燃費はいいが人二人浮かぶ力はないし、セラの風の魔術も同じ理由で厳しいだろうな」
ちらりとセラを見やると、セラは暗い表情でこくり、と頷いた。
『だったら俺がこいつらをなんとか惹きつけて……』
「グレン」
動揺するグレンを一声で抑える。

『っ』
　そしてヴァイスはふっ、と顔を緩めて言った。
「……最近、フェジテにコーヒーが美味い喫茶店ができたらしいな」
『あ、あぁ……お前、コーヒー好きだもんな』
　唐突に関係ない話を振られたグレンは困惑しながらも言った。
「あぁ、あの苦味が堪らねぇんだよな……今度お前も付き合えよ、てか奢れ」
『……俺コーヒ苦手なんだけど』
　コーヒーの苦みを想像で味わいながらヴァイスは言った。
　そして苦手と言ったグレンをはっ、と鼻で笑いながら
「子供舌」
　と弄った。
『るっせぇ！……ま、でも挑戦してみんのも悪かないかもな』
　そんなグレンの言葉にヴァイスは目を見開き、すぐに表情をもどして笑った。
「ま、そんなわけで俺には帰る理由があるわけだ、だから必ず帰る」
『……』
　ヴァイスの言葉にグレンは黙っている。
「だからグレン、お前は一足先に帰ってコーヒー飲む心の準備でもして待ってな」

これまでのヴァイスからは想像もできないような諭すような声音でグレンに言った。
『……』
それでもまだ黙ったままのグレンにしびれをきらしたヴァイスは
息を吸い込み通信魔道具に向かって思い切り叫んだ。
「逃げろぉ！　グレン＝レーダスッ!!」
『……クソッ！』
グレンの毒づきが聞こえた直後、魔道具の通信が切れる。
向こう側は見えないがこの様子からして逃げてくれたようだ。
それにヴァイスは大きなため息をついた。
「……逃げたか、いちいち怒鳴らなきゃできないとはやっぱり子供だな」
その言葉にセラがふふ、と笑いながら言う。
「そこがグレン君のかわいい所じゃない？」
「……まぁ、嫌いではないけど」
素直じゃないヴァイスにセラはまた笑みを零す。
「ふふっ」
「笑うな」
繰り返し笑われたヴァイスはそう言いながら顔を仏頂面にした。

それを見てセラはまた笑って、すぐに顔を寂しげに変えた。
「……グレン君には生きてもらいたいね」
その言葉を鼻で笑いながら否定した。
「アホ、俺らも帰るんだよ……それに、あいつがコーヒーを飲むなんて絶対面白いぞ。見逃せねぇだろ」
セラもグレンが苦いコーヒーを顔をしかめながら飲む姿を想像したのか
「ふふ、そうだね」
と笑いながらセラはヴァイスの背後の敵に対して
魔力を練りながら詠唱に入った。

ヴァイスの背中を、守るように。

それを皮切りにしてヴァイスも自身の得物である片手剣を構える。
すでに剣は度重なる酷使により刃こぼれしているのが見て取れる
敵意を感じ取ったか、大量の敵達、《天使の塵》は
それぞれ多種多様な得物を振りかぶりながらヴァイスらの元へ
駆け出した。

「「ガァァァァァァ!!!!」」
「さぁ、殲滅戦だ!!」
「うん!」
剣閃と風が敵を襲った。

†　†　†　†　†

「ガァァァァ!!……ガッ」
飛び掛かってきた敵……《天使の塵》の感染者をヴァイスはグレンとお揃いの痛覚を引き上げる魔術を付与したナイフで敵の喉を刺し貫き、そして敵の腹を蹴飛ばしながらナイフを捻り抜いた。
蹴飛ばしたことによって吹っ飛んだ敵は後ろにいた敵にぶつかり将棋倒しになった。
その倒れた敵達に詠唱済み(スペル・ストック)であった《ライトニング・ピアス》を撃ち込んで止めを刺した。
「くっ……魔力がもうない……っ」
マナ欠乏症による頭痛で頭を押さえる。
背後でセラが風の改変した魔術で敵を切り裂きながら心配の声を上げる。

「シロ君、大丈夫!?」
「大丈夫に見えるか……これがっ!!」
セラの声に自身の体の異常を無視するために軽口を叩いて不敵に笑いながら
また魔術を詠唱する。
少しでも魔力の消費を抑えるために省略せず、魔力消費の少ない《ショック・ボルト》を改変、詠唱する。
「《焼き切れろ》っ!!」
近くに居た敵に出力を抑えた魔力放出によって瞬発力を足裏に生み出し、勢いに任せ頭を引っ掴み、敵の脳髄を焼き切ってモノ言わぬ死体になったソレを思いっきり敵の集団に投げつける。
そしてその集団が倒れこんだ事によりちらりと背後に出口が見えた。
「よし、もう少しだな……」
絶望的な状況の中に希望が見え、ヴァイスは気をほんの刹那の間だが緩ませる。
――それが不味かった。
死角である頭上から敵が得物であるナイフを構えながらヴァイスへと飛び込んできた。
先程の気の緩みとマナ欠乏症による酷い偏頭痛と疲労により

ヴァイスはそれに気づくことができなかった。
「ッ!?　シロ君!!」
頭上からの奇襲を受けていることに気付いたセラは名を叫びながら
一気に駆け出した。
「ッ!?　セラ!?」
セラは思いっきりヴァイスを突き飛ばした。
ヴァイスは突き飛ばされた勢いで後ろに飛ばされ、満身創痍の体では勢いに耐えることができずに尻餅をついてしまった。
「お、お前……何をッ!?」
突然の出来事にヴァイスはセラに一言文句を言おうと突き飛ばしたセラを見ようと顔を上げた。
しかし、ヴァイスが見たものは……悪戯が成功したように舌を出しながら笑うセラ。
ではなく――
こちらを突き飛ばした体勢のままこちらを見るセラ。
その表情は何故か必死で、ヴァイスにはなぜそんな必死の形相なのか
理解できなかった……理解する暇すら与えてもらえなかった。
奇襲しようとしたがセラの手によって防がれた敵は奇襲を阻止した人間に

敵意を向けた……セラ＝シルヴァースに。
この先どのような展開を迎えるのか理解してしまい、掠れた声で嘆く。
「や、やめろ……やめてくれ……」
《天使の塵》によって自我を破壊され、忠実な人形と化した敵が当然ヴァイスの懇願を聞くわけがなく、セラの背後を取っていた敵は得物のナイフを思い切り振りかぶり――。
「やめてくれ……また俺から奪うのか……っ!?」

――セラの背中から恐ろしいほど大量の鮮血が舞った。

「セラ……せ、セラぁ……ッ!!」
手を伸ばすが、届かない。
そんなもどかしさと悔しさにヴァイスは顔を酷く歪めた。
そんなヴァイスにも敵の魔の手は迫る。当然だ、これはゲームではなく、現実なのだから。
尻餅から手を伸ばして四つん這いになっていたヴァイスの背中に敵の様々の得物が突き刺さった。
ナイフ、包丁、フォーク、果ては羽ペン――。

それらが突き刺さったことによってヴァイスは痛みに呻く。
「……ガッ……グフッ……」
それでもヴァイスは死力を尽くしてセラを見続けた。
セラは背中を大きく斬られたことで大量の出血によって貧血を起こし
セラはすでにヴァイスと同じくうつぶせで倒れていた。
「……せぇ、ひゅぁ……」
セラの名を呼ぼうとするが背中を刺されたことによって肺に穴が空いたようで
思ったように声が出ない。
気道も出血で塞がりかひゅー、かひゅーと口から音が漏れ出る。
出血が止まらず、意識も薄らぐ。
（あぁ、くそ……死神も焼きが回ったな……まだ三年だぞ）
酷い鉄の味がする口で舌打ちをしながら自嘲気味に笑う。
「シ……ロ、君……」
唐突にか細い声がヴァイスの耳に届いた。
掠れた目で必死にセラに焦点を合わせる。
焦点が合ったとき、セラはヴァイスに微笑んでいた。
今にも死んでしまいそうな出血にも関わらず、徐々に重くなっていく目蓋を必死に上

げながら。
その顔を見て酷い後悔と罪悪感が湧く。
（セラ……悪い、あの時の約束……守れなかった）
思い出すのは、今から二年前に涼しげな風が吹く高原で交わした約束。
『また俺が道を間違えた時には、手を差し出して元の道に引き戻してほしい』
その代わり――。
『その代わり、俺もお前になにかあったら迷わず手を差し出すよ』
小指を絡めて誓い合った口だけの契約。
それは呪術的拘束や魔術的契約よりも簡易的な口契約。されど如何なる契約よりも固く結ばれたその契約。
それを違えてしまったヴァイスの心情は察して余りある。
違えてしまった約束を悔やんでいるとセラの口が動いてるのが見えた。
もう声を出す力も残っていないのか口だけが動いている。
ご……め…ん……ね……。
ごめんね。
セラのその声なき言葉がヴァイスの心に突き刺さる。

（クソ……約束守れないとはとんだ屑野郎だな、俺も）

酷い……酷く深い後悔を抱えながら意識を手放した。

そして。

意識を手放したことによって全体重が地面に溶けていき。

パキン。

何が薄いものが割れる音が響いた――。

†　†　†　†　†

先の悲劇が起きる三年前。

アルザーノ帝国魔術学院を少々異例の卒業を果たしたヴァイス＝フィーベルは魔術の才能を国軍省に買われ、現在国軍省の某室で魔術学院時代からの仲であるイヴ＝イグナイトにスカウトを受けていた。

その部屋は政府の重鎮達も使う部屋で機密性もお墨付きだ。

室内の壁には魔術的な施しがされており、物理的には勿論、魔術的にも相当な手練れ……かの第七階梯セリカ＝アルフォネアでもない限り盗聴は厳しいだろう。

そんな部屋でヴァイスとイヴはまたしても重鎮ら御用達のふかふかの椅子に座っており、そのイヴの背後にはイグナイト家の召使いである老齢の男が目を閉じて立っていた。

召使いの条件である、見ざる、聞かざる、言わざるを理解しているようだ。

その心持ちは流石老齢、と言ったところだろうか。

「……それで、ここまで質問はあるかしら？」

とイヴは使いに用意させた紅茶に口をつけながらそうヴァイスに訪ねた。

先程までヴァイスはイヴにこれから配属される帝国宮廷魔導師団のある部署の説明を受けていた。イヴはその部署の次代室長になるらしい。

ヴァイスらにスカウトの話が持ちかけられる前にイヴは既にその部署の所属が決定されていたらしい。なんでも代々イグナイト家がその部署の室長を務めるのが風習だ

そうだ。
……というところまでは聞いていたのだが。
「あ、えぇと……あぁ～……まぁ、概ね？」
言葉を濁しながらイヴから視線を逸らして、紅茶を音を立てて啜る。
その姿にイヴは視線を強め、ヴァイスに視線が突き刺さるような錯覚を覚えさせ
冷や汗を掻かせた。
「……話聞いてなかったわね？」
「そ、そんなこと……ありましたすいませんでした」
口を開けばドスが効いた声で言うイヴに
ヴァイスはさらに冷や汗の量を増やしながら否定しようとするが、その瞬間に
イヴの視線がきつくなったためヴァイスはすぐに謝る。
昔から彼女を怒らせるとロクでもないことになるのはヴァイスの経験則でわかって
いる。……具体的に言えば、燃やされるのだ。
「最初からそう言いなさいよ、手間をかけさせないでもらえるかしら」
強くしていた視線を緩めながらイヴはヴァイスをそう咎めた。
「大体、イヴの話が長すぎるんだよ」
「悪かったわね、だけどご生憎様。さっきも言ったけど貴方が配属される部署は私が室

長なの。だから私には今後従ってもらうわよ」
　言い訳を適当にあしらいながら今後室長と部下の関係だと念を押すイヴ。
　……まぁどうせ念を押そうがこの銀髪の青年は変わらないのだろうが。
「はいはいはい、従いますよ～仰せのままに室長様」
「……はぁ、もういいわ。詳しい話はもう貴方が特務分室に所属してから話すことにするわ……今日はもう帰っていいわ」
　ヴァイスの態度に深いため息を吐いたイヴは諦観と共に今日はもうお開きにすることにした。
「お、じゃあ送ってくれるのか!?　いやぁ帰りの列車代使わないでご飯に使いたいんだよなぁ！」
「……全く図々しいわね」
　ヴァイスの態度にあの黒髪の忌々しい愚者の面影を見たイヴは
　少し不愉快とでも言いたげな表情でこの図々しさは誰に似たのだろうかと
　口でも心中でも呟いた。
　仕方なしに右手を軽く挙げると背後にいた老齢の使いが深く腰を折り
　流れるような動作でドアを開けてその隙間を潜っていった。
「入ってきた門の前で待ってなさい。彼が馬車でフェジテまで送ってくれるわ」

……なんやかんやでこんなヴァイスと学院時代から友人として付き合えているのはイヴにこういうところがあるからだろう。

「おお！　ありがとうイヴ！　じゃあまたな！」

まるで花が咲いたような満開の笑顔のヴァイスにイヴはちらりとヴァイスを見やり、すぐに視線を外し目を閉じ、ふんと鼻息を一つ。

もう話すことはないという学院時代からのイヴのサインだ。

それを知っているヴァイスはその態度を何も気にせず、男が潜っていったドアを同じように潜っていった。

イヴは背後のドアがバタンと閉まる音を聞いた瞬間、肩の力を抜いて息を吐いた。

もう部屋の中にはイヴ以外誰もいない。

盗聴などの心配もないためイヴは人の目を気にする必要もなく、独り言を呟いた。

「あんなことがあっても彼は変わらないわね……だから彼は彼足り得るのだけど」

彼女はそう言ってふふん、と笑いを漏らす。

彼女は実家では独り言など呟く場所すらないだろう。

それだけ肩身が狭い思いをしてきたのだ。自身の本当の気持ちを押し殺してきた。

学院にも他人の意思によって通っていた。そこに自分の意思は介在していない。

きっと学院でも肩身の狭い思いをするのだろうと思っていたが、彼のおかげか多少は

マシな学院生活を送れたと思う。
「まぁ、多少は感謝はしてやるわ。でも……それとこれとは別。日頃迷惑かけられていた分、コキ使ってやるわ」
不敵に笑うイヴはまるで悪戯好きの紅色の猫のようであった。
「……!?」
ヴァイスは突然襲った背中の悪寒に鳥肌を立てる。
両腕を摩りながらヴァイスは国軍省の廊下を歩いていた。
「なんか寒気が……風邪かな……?」
怪訝な表情で呟くヴァイスはイヴの思惑に気付くことはなかったのであった。

プロローグ2

――ゴトゴト、ゴトゴト。

帝都からフェジテまでの道のりにある森林内の砂利道に高級感溢れる装飾を外装に施している馬車が音を立てながらゆっくりと音を立てながら進んでいた。

御者の役目はイヴの実家で仕える老齢の、イヴからは彼と呼ばれたその男性が果たしている。

馬の手綱を見事に操るその手前は流石執事、と言えば良いのだろうか？

でこぼこな砂利道な筈なのにも関わらず、馬車の中にいるヴァイスは揺れをほとんど感じておらず実に快適な帰路であった。

その帰路に着きながらヴァイスはこれからの事をニマニマとイヴやグレンらが見れば

恐らく気持ち悪いと酷評する程頬を緩ませながら考えていた。

（俺が宮廷魔導師かぁ……てことは俺もついには公務員か。こりゃ将来安泰だわ安泰。魔術師を撃退するだけの簡単な仕事をこなすだけで多額の年収が俺の手に！）

ニマニマ。

「フィーベル殿」
（なんやかんや幼い頃は散々な目にあってきたからな。これくらいは当然だろうけどな！）
　ニマニマ。
「フィーベル殿？」
（これで親父達にもやっと笑顔で報告できる。……まぁ、あれから帰ってないんだけど）
　ニマニマニマニマ。
「もしも～し、フィーベル殿～？」
（てことはまずは何年も帰らずに顔を合せなかったことに対する謝罪だな。とりあえず母さんには香水をシスティーナには……メルガリウス関係の本とかにしよう。親父は……まぁ、いらないか）
　ニマニマニマニマ。ニマニマニマニマ。
「ヴァイス＝フィーベル殿～？」
（考えるだけでもたくさんやるべきことがあるな……夢が広が）
「返事をしないとイヴお嬢様にフィーベル殿がお嬢様を陰ながら罵っていたと根も葉もない話をすることになりま」
「る前に僕が塵も残らず燃やされるからやめていただけますか!?」

とんでもない脅迫が耳に届いたヴァイスは馬車内の座席から音を立てながら立ち上がる程
動揺しながら、慌ててその脅迫をしてきた侮れない老齢の男に抗議した。
「フィーベル殿が先ほどから私めが呼びかけているのに反応なさらないのが悪うございます。この老いぼれめの軟弱な頭ではこの方法しか思いつきませんでした……気に障ったようであれば謝罪いたします」
「あ、あぁ～……すいません」
爺の顔に映る申し訳なさ２００パーセントの顔にヴァイスも落ち着きを取り戻す。
そして先程から自分が呼びかけを何度も無視していたことに気付き、すぐに謝る。
素直な謝罪に爺は瞳と口を緩ませ、優しそうに笑いながら口を開いた。
「いえ、私も他に方法があったやもしれません。今回はお互い様、ということにしておきましょう」
「は、はぁ……」
とんでもない脅迫をしたり申し訳なくなったり笑ったりと表情が二転三転する
老齢の男……爺に翻弄され
ヴァイスも困惑した顔で曖昧な返事しか返すことができない。
そしてあぁ、そうでしたと呟きながらヴァイスの顔を見た。

「私はフィーベル殿に言っておきたい事があったのでした……フィーベル殿」
優しげな雰囲気から打って変わり、真剣な表情になった爺の姿に
ヴァイスの顔はさらに困惑の表情を強く出していた。
「は、はい？」
「私から何かを言っても恐らく悪い印象しかお持ちにしかならないので一つだけ。覚悟をなさい。それだけです」
まるでヴァイスがこれからどうなるのか知っているような言いぐさとそれを物語るような
鋭い視線にヴァイスも表情を困惑していた顔から真剣な顔つきにしてその視線に正面から目を合わせて答えた。
「肝に銘じておきます」
そのヴァイスの表情からなにを見据えたのか爺はまた優しそうな表情に戻り
嬉しそうに笑い出した。
「ほっほ、老いぼれめの言葉なんぞ頭の隅に置かれるだけで十分でしょう。私は馬のご機嫌を取らなければならないのでフィーベル殿は休息を取られるとよろしいかと。まだフェジテまで少しかかります故」
「……わかりました」

爺に勧められ椅子に凭れながら目を瞑ろうとするがそれは叶わなかった。
他ならぬ勧めた本人の手によってだ。
「あ、フィーベル殿。最後に一つだけよろしいですかな?」
「はい?」
「お嬢様を今後ともよろしくお願いします。学院時代の旧友ならばお嬢様がどういった性格をしておられるかはわかりますでしょう?」
爺の言葉にヴァイスは笑いながら自嘲気味に答えた。
「……はは、旧友と言えるほど付き合いは長くありませんけどね。せいぜい三年ですよ」
せいぜいと言ったがその三年は本当に密が高い三年だったとヴァイスは思っている。
ヴァイスの言葉に首を振りながらその言葉を否定しながら爺はにこりと微笑む。
「お嬢様からすればそれはもう十分に旧友に入りますでしょう。お嬢様は少なくともそう思っておられる筈ですよ」
「…そうだといいんですけどね。なにぶん燃やされてばかりでしたから」
思い出すのは学院時代で何かあれば不敵な笑みで炎系魔術で髪を焦がそうとするイヴ。
今思い出しても恐怖体験モノだ。
「……思っておられる筈ですよ、きっと」

「……そうだと、いいんですけど……たははは……はぁ」
爺の自信なさげな言葉に力のない笑いを漏らした。
「フィーベル殿、まだフェジテまで時間がかかります故、少しお休みになられてはいかがでしょう？　寝れば暗い気分も少しはマシになるというもの」
ヴァイスの光を失くした瞳を見て流石にこのままにするのは話題を振った者として気が悪いのでフォローを入れた。
「……そうさせて頂きます」
そう言って自分の過去の黒歴史（文字通り黒炭にされそうになった歴史）を頭の中から追い出すために目を瞑り無理矢理思考を止めて眠りにつくのだった。

†　†　†　†　†

ゴトゴト音を立てながら縦に揺れる馬車の御者台。
そこに老齢の男……リブル＝ウェルダンが馬の手綱を握っていた。
ちらりと背後に設置される小さな窓を除けば肘を窓に立てながら眠っている青年の姿。
「ヴァイス＝フィーベル……ですか」

フィーベル。
その家名で思い当たるのはフェジテで大地主をしている貴族しかいない。
それと同時に魔導考古学者で有名なレドルフ＝フィーベルの名も浮かぶ。
そして疑問。
「ふむ……確かフィーベル家には長男は居なかった筈（・・・・・・・・・）ですが……」
噂を聞いた限りではフィーベル一家には一子しかおらず、尚且つその子供は確か女の子で、名はシスティーナと言ったはず。
「魔導考古学で有名なフィーベルの家に生まれながら魔導師を目指す少年ですか……」
実に興味深い。
お嬢様がずっと学院時代にお世話になったと聞いていたからどんな男だと見てみれば。
まさかフィーベルの家の者でしかも存在していない長男。
しかも見ればかなり若い。
お嬢様より少し年下だろうか？
とすれば学院は最年少で入学したことになるが、ついぞそんな噂は帝都には届いていない。
……本当に実に興味深い。

「それにあの眼」
お嬢様と国軍省で話しているときにちらりと視たが
あれは……
「いえ、考えるのはやめましょう。現実になるといけませんから」
首を振りながらリブルは彼の眼について考えを振り払った。
そしてまたちらりと横目で眠る青年を見やる。
「ヴァイス＝フィーベル……貴殿の歩む道は恐らく修羅の道だろう……若者らしくあがいて、あがいてあがき倒すのだ。そして道を失わないようにされよ」
リブルはその青年を見やりながら今言っても意味のない忠告を呟いた。
彼の歩む道はきっと真っ当なモノではないだろう。
それでもお嬢様の友人でいてくれる彼に願わずにはいられなかった。
死なないでくれ……と。
「どうかタウムの加護があらんことを」
彼の祖父であろうレドルフ＝フィーベルの論文で有名な天空の双生児《タウム》神殿の御神体が彼を守ってくれるように祈るのだった。

†　†　†　†　†

……ある子供の、夢を見た。

『このバケモノ！』

名も知らぬ女の子がソレにモノを投げつけながら叫ぶ。

――化け物じゃない。

『触るな！　バケモノの菌が移るだろっ!!』

つい数週間前まで仲が良かった男の友達が手を振り払いながら叫ぶ。

――化け物じゃない……

『なんでバケモノがこの学校に入園できたのかしら。人間じゃないのに』

汚物を見るような眼差しで見つめる同じクラスの子供の母親達。

――化け物じゃないっ！

『すまないが明日から君は来なくてもいいからね。……ったく化け物なんか面倒見きれるかっての』

貼り付けたような笑顔でそう言って、小さく罵詈雑言を吐き捨てる男。

――化け物なんかじゃないっ!!

酷く人に焦がれる、夢を見た。

叶う筈のない、夢を見た。
ソレが家に帰れば
『おかえりなさい、今日も楽しかったかしら？　■■■■』
『おお！　今日は早いな■■■■！　友達とは遊んでこなかったのか？』
家族からの惜しみない愛情が待っていた。
しかし、人に成り損なってしまった化け物の■■■■はその愛情すら苦痛に感じた。所詮は獣、人間の愛情など愛しく感じるはずもない。
いつかこんな辛く苦しい日々が終わることを両手を合わせ強く握りながら願っていた。
この苦しみから解放されることを
『……お前、私の弟子にならないか？』
そして。

―――――――――――――――

―――――――――――――――

―――――――――――――――

「……！　……ベル殿！」

暗闇が広がる空間で誰かを呼ぶ声が聞こえる。
「フィーベル殿！」
「……ッ!?」
耳元で叫ばれた声にヴァイスは跳ね起きた。
寝起きで思いっきり勢いをつけて文字通り跳ね起きたので起こる現象はただ一つだった。
「アダッ……!?」
馬車の天井は女性には問題ないだろうが男性には少し天井が低いのだ。
ヴァイスは思いっきりは天井に頭を激突させた。
帝都からフェジテまでの短い馬車の旅は快適とは言えなくなったようだ。
「ほっほっほ、フェジテに着きましたぞ」
「あ、ありがとうございます……いっつぅ」
頭をさすりながら馬車を降りると目の前は自宅として使わせてもらっているかの人外と称された域まで上り詰めた第七階梯の魔術師、セリカ＝アルフォネアの家だった。
どうやら自分の家までわざわざ送ってくれたらしい。
「い、家まで送ってもらって感謝します……えっと」
「そういえば名前を言っておりませんでしたな」

爺は深く深くお辞儀をして名乗った。
「私めの名はリブル＝ウェルダン。どうかリブルと御呼びください」
「ではリブルさん、送って頂きありがとうございます」
「ほっほ、いえいえ。お嬢様に命じられておりましたので」
そう笑いながら言ったリブルに釣られてヴァイスも頬を緩める。
そんな別れ際にヴァイスにここ数年間聞き覚えがありすぎる声が聞こえてきた。
「ヴァイス、今帰ってきたのか」
背後の玄関から聞こえてくる声には喜色が混じっている。
ヴァイスが後ろを振り向けば予想した通り、この家の家主のセリカだった。
先程まで寝ていたのか、普段は枝毛一つない金髪は寝癖でボサボサで
来ている服もかなり際どく、セリカが持っている女の武器を前面に押し出した格好になっている。そんな恰好にもヴァイスは顔を赤くすることなく呆れた笑みを浮かべながら
「セリカ……外に出てくるのにその恰好は不味いと思うんだけど」
「ふふ、なんだ？　私の体に欲情するからか？　この変態め！」
敢えて身体を見せつけるように立ち回りながらセリカは笑いながらからかう。
「いや、違うから！　今目の前に俺以外の人いるでしょうが！」

ヴァイスの言葉に怪訝な表情をしてヴァイスの背後に目を凝らす。
そしてセリカははっとしたようにリブルを指さしながら口を開いた。
「んぁ?……あぁ!! オマエ、リブルだよな!?」
「ご無沙汰しております、セリカ様」
セリカの言葉にやけに礼儀正しく礼をしたリブル。
その状況にヴァイスは首を傾げる。
そんなヴァイスのことなぞお構いなしにセリカとリブルは会話に花を咲かせていく。
「なんだオマエ、ここ何年か見ないと思ってたがまさかその恰好……」
つま先から頭の先まで隅々まで顎に手を当てながら見やる。
そんな視線も気にも留めないような仕草でリブルはやけに大仰な動作で頷いた。
「はい、今はイグナイト家の方で専属の執事をやらせていただいております」
「ほぉ……昔はともかく、今は老齢のできる執事って感じだな!」
感嘆の溜息の後にセリカは恐らく昔のリブルの姿を思い浮かべながら
今のリブルの隣に脳内投影して比較しながらそう笑いながら言い放った。
「ほっほっほ、昔は私めも元気でしたからな」
遠い眼をしながらそういうリブルは懐かしんでいるように隣で見ているヴァイスには見えた。

「うわ、その笑い方に人称！　滅茶苦茶雰囲気変わったな……ちょっと気味悪いぞ」
引き気味な表情のセリカ。
そんなに今と違うのだろうかと隣で聞いていたヴァイスは完全に蚊帳の外状態で若干の疎外感を感じながら思う。
「あれからもう４０年ですから、それは雰囲気も変わるでしょう」
「ああ～、あれからもう４０年か……早いものだな」
リブルからでた４０年、という言葉にセリカは感慨深そうに言葉を漏らし
リブルはそれを聞きうんうんと頷きながら言った。
「セリカ様は《永遠者》ですから他の一般人とは時の感じ方が違うのでしょうな」
「まぁな……それでもっと話を聞かせてくれ」
「ほっほ、不肖リブル、お相手いたしますぞ」
それから繰り出される会話はもうヴァイスには理解不能だった。
「……？？？？」
状況、会話共に理解できないヴァイスは首を傾げることしかできなかった。

それから二人は延々と会話を続け――。

「それがだな……っともう日が暮れてきているな、リブルも帝都に戻るといい。執事が主に仕えていないと執事失格だしな」
「おぉ、もうそんな時間でしたか。いやはや、年を取ると話が長くなっていけませんな……」
「じゃあな、また来いよ」
「はい、また機会があれば」
そう言った後リブルはまた丁寧に礼をして手綱を握り馬を動かし
来た道を引き返して行った。
「やっと話終わったか……あぁ～足痛ぇ～」
日が暮れるまで話をずっと棒立ちで聞いていたので足が鉛のように重い。
少しでも足を楽にしようと足をプラプラと振っていると
「なんだヴァイス。ずっと隣で待っていたのか？　先に中に入っていればよかったじゃないか」
確かにその通りだ、と思ったがそれを気付かないヴァイスではないのだ。
その言葉に半眼でセリカを睨んだ。
「セリカがそこで立ってるから入れなかったんだよ」
「おぉ、気付かなかったよ。それは悪かったな」

やけに大きな身振り手振りと表情で言ったセリカにヴァイスは視線を厳しくした。
（絶対わざとだろ……全くこっちは遠出で疲れてるっていうのに……）
たまにこうしてセリカはヴァイスに地味なイタズラを仕掛けてくる。
実に地味だが時には今回のような地味に辛いイタズラもしてくるのでヴァイスとしては
勘弁願いたいところだ。困った義母である。
「それより、リブルさんとは知り合いなのか？　随分親しげだったようだけど」
セリカの悪戯を咎めるよりも先ほどから気になっていたことを
セリカに尋ねると、セリカは腕を組みながら少し怪訝な表情をした。
「うん？　お前知らないのか？」
「？」
「リブル＝ウェルダン。彼は４０年前の報神戦争で生き抜いた歴戦の猛者だよ。結構軍の方ではそこそこ有名な話だが知らないのか？」
「なっ!?」
あの老齢の男は食えない男だとは思ったがまさかそんな強者だったとは。
驚愕しているヴァイスを気にせず思い出すように手を顎に当てながら
セリカは答えた。

「ゼーロスが二刀細剣の達人なら、あいつは片手剣の達人だな。ゼーロスといい勝負をしていると思うぞ」
かの有名な《双紫電》と同等の実力者ということは相当の使い手なんだろうとヴァイスは
納得する。あの掴みどころのない言動も頷ける。
「能ある鷹は爪を隠す……か」
そう呟き感嘆するヴァイスに何故かセリカがむっとした表情をした。
「まぁ、でも私の剣の腕の方が上なんだけどな！　はっはっは！」
セリカは薄着しているせいで強調されている胸を張りながらそう豪語した。
ヴァイスは心中、なに張り合ってんだか……と呆れながらやれやれと言わんばかりに
肩をすくめた。
「セリカの腕前は借り物じゃん。知ってるぞ、セリカ剣使う前に《ロード・エクスペリエンス》こっそり詠唱してんの」
痛いところを指摘され、セリカはうっ、と声を詰まらせながら
負けじと必死の弁明をしていた。
「あ、アレだって私の腕前だぞ……？」
「どうだか」

セリカの弁明を一蹴しながらヴァイスはセリカの家門を潜り、家へと入っていった。そんなヴァイスの背中を見ながらセリカは。

「ヴァイスが冷たくて私は寂しいぞ……グスン」

およよ、と泣き崩れるマネをしていたが、それに反応する者は誰も居なかったのだった。

プロローグ　3

ヴァイスが帝都からフェジテに到着した頃。
訳あってセリカ＝アルフォネア宅にて居候している黒髪の青年、グレン＝レーダスはセリカからもらった部屋の机で作業をしていた。
その机には多種多様な魔術的触媒、試薬や資料、論文などがひしめく他になんの魔術的意味合いのない焼き鏝や筆やペインティングナイフなどの画材道具もある。
これら全ては自分の使い道がないと思っていた《在り方》を《力》に変えるために。

†　†　†　†　†

俺は、小さい頃に《メルガリウスの魔法使い》のような
目に見える困った人々を颯爽と救っていくような《正義の味方》に憧れた。
……だけど俺には、決定的に魔術の才能がなかった。
《変化の停滞・停止》。

珍しさとしては非常に稀有な魔術特性だがその内容は。
どれだけ努力して、魔術の質を上げようとしようがその魔術特性によってブレーキを掛けられてしまうというものだ。
その事実は幼少の頃の俺をいとも簡単に絶望させた。
それまで想い焦がれ、目指した夢を諦めろと言われた気がした。
絶望して絶望して、そして諦めかけて――。
『皆を守れればどんな《力》でも構わないとボクは思うな』
だけど、答えは得た。

†　†　†　†　†

幼少の自分を思い出して笑みが零れる。
思い出している間もグレンの作業の手は止まらず動き続けていた。
そして。
「……よし、完成！　……あぁ～疲れたぁ……」
グレンは完成したことの達成感を感じながら凝り固まった筋肉をほぐすように背伸びをして体を軽く捻る。

ボキボキッと心地良い音と快感に目を細めていると外がなにやら騒がしいことに気付いた。

「……？」

自室に設けられた窓から外を見やれば、玄関に馬車が止まっていた。

「……あぁ、ヴァイス帰ってきてたのか」

見るとヴァイスの隣に老齢の燕尾服を着た男性が立っており、寝間着のセリカと親しそうに雑談をしている。

ヴァイスはうんざりしたような顔で口を挟まず突っ立っていた。

「あいつと俺もついに魔導師か……」

夢に一歩近づいたことの実感を噛みしめながら

銀髪の青年を見やる。

「ほんっとアイツ変わったよな……」

ふと思い出す。

彼がこの家にやってきた頃を。

「セリカ……誰なのこの人」
今に比べて口調が柔らかいグレンが
目の前の状況を理解できずに困惑気味の顔でセリカに尋ねた。
「今日歩いてたら面白そうな奴を見つけたから弟子に誘ってみたんだが」
欲しい玩具を手に入れた子供のようにご機嫌な顔で言ってのけた。
その言葉にグレンは思わず目の前の自分と同じ年齢と見える少年を見やった。
「……」
さらりとした銀髪にふっくらとした頬。
目鼻立ちも整っているので、大きくなれば十分にイケメンと呼べるだろう。
しかし、彼にはそれらをすべて差し引いてもマイナスにしている要素があった。

……眼だ。
彼の眼には恐ろしく思えるほどにまで、光がなかった。
その眼は何も映しておらず、感情も感じない。
どこまでも淀んだ暗闇が続くその瞳は、幼いグレンには目を合わせ続けることができなかった。

「(こ、こわい……)」
その眼に気圧され冷や汗を掻く。
「今日からグレンが先輩だからな、ちゃんと世話してやれよ?」
セリカはそんなグレンに気付かずにご機嫌のままそう言い放った。
「う、うん……わかった……」
「……」
銀髪の彼は相も変わらずに瞳に光を宿さずにこちらをずっと見ていた。
「(すごく気まずいんだけど……っ!)」
グレンは冷や汗をダラダラ流しながら目をまた逸らした。
「これから、よろしく……」
「あっ、うん! よろしくね! えっと……」
「……ヴァイス、ヴァイスでいい……」
彼はヴァイスと名乗り、それ以上は何も言わないとでも言うかのようにまた黙ってしまった。
「よろしくね! ヴァイス君!」
これが出会い。

「あれは怖かった」
ヴァイスの眼を思い出してぶるりと震えるグレン。
その時。
コンコンコン。
『グレン、いるか？』
ドアの向こうから響くのはつい先まで考えていた銀髪の青年の声。
「あー、いるぞー。入っていいぞ」
グレンは思考を引き戻して入室を促した。
その直後、ガチャ、と良い音を立てながら開いたドアから
ヴァイスが入ってくる。
「おう、二日ぶりだな……って散らかってんなぁ～……」
「入ってきた第一声がそれかよ」
ヴァイスの言葉にグレンは苦笑した。
ヴァイスは散らかった机の上を覗きながら口を開いた。

「魔術触媒に研究論文に画材かこれ？　あとこれは……愚者のアルカナ？」
怪訝な表情で呟きながら一際目立つタロットカードのようなものを
手に取ろうとするが、グレンに止められる。
「あぁ、まだ触るなよまだ絵具乾いてないから」
「なんだこれ、魔道具か？」
「お、さっすがヴァイス！　鋭いな。これ俺のオリジナルなんだぜ！」
グレンの言葉に目を見開き、すぐにさも自分の事のように嬉しそうに
笑った。
「オリジナル？　ってことは完成したのか!?　やったな！」
それに釣られてグレンも顔が綻ぶ。
件のオリジナルとは、魔術師の悲願とも言える魔術特性を生かしたオンリーワンの魔術
固有魔術のことだ。
グレンの魔術特性は《変化の停滞・停止》。
この特性は見方を変えればデメリットはあれど魔術の発動なども停止させたりできる。
他にも可能不可能はあるが、理論だけならばいくらでも提唱できる。

これが魔術特性が魔術師に重要視される理由だ。
以前では机上の空論であった理論でもたった一つの特性が全てを覆す。
現在の魔術師が特性を神聖視しているのも理解できるだろう。
「じゃあ、完成した祝いでコーヒー飲みにいこうぜ！」
「げぇ、俺コーヒー苦手って知ってるだろ……」
ヴァイスの祝い、という言葉に顔を輝かせるがすぐにコーヒー、という言葉で顔を顰めた。
「じゃあお前はケーキでも食ってろよ、ほんっとガキだなぁ」
「るっせぇ！」
煽りに過剰に反応していることが子供っぽいということに気付かないグレンであった。

†　†　†　†　†

グレンの固有魔術完成の日から数日。
グレンとヴァイスはこれから宮廷魔導師団に所属して勤務するという理由とイヴの計らいによって帝都に住居が与えられた。

――しかもそれぞれ、である。

「イヴも太っ腹だよなぁ……よっと」

豪邸ではないにせよ一人で暮らすには余りにも十分すぎるその家に、ヴァイスは居た。

一人で引っ越しの荷物を部屋に運んでいた。

「よし、とりあえずこれでよし」

「何が、よしよ、全く片付いてないじゃない」

満足そうに頷くヴァイスを聞き覚えのある女性の声が一蹴した。

その声を聞いた瞬間、背後にいる人物が誰かわかったのか

苦笑しながら振り向いた。

「やっぱりイヴか……」

「あら、私だったことが不満なのかしら?」

そう言いながら手をすっと上げるイヴを見てヴァイスは顔を青ざめさせた。

「不満なんてないです! むしろ嬉しいから! だから《ブレイズ・バースト》は勘弁してくれ! ていうかお前が支給した家だろ!?」

「……ふん、まぁいいわ」

慌てたヴァイスを見て少し落ち着いたのかは定かではないが、イヴはすぐに手を下ろ

した。
そして鼻を鳴らして部屋を一度ぐるりと見渡した。
「他の部屋もこんな感じなのかしら？」
「まぁな～、今朝帝都着いたばっかだし」
適当な箱から魔術触媒や実験道具を取り出して軽く目を通して整理しながらヴァイスは言った。
どうやらここは研究室になるらしい。
そんなヴァイスにイヴはため息を漏らした。
「はぁ……仕方ないわね、私も手伝うわ」
「……まじ？」
イヴの言葉にヴァイスは目を瞬かせながら言った。
その言葉が信じられないと言った様子だ。
「なにか問題でも？」
野獣が如き眼光にヴァイスはもう何も言うことはできなかった。
反応に満足したのかイヴはヴァイスの隣まで移動し、箱の中身を覗きこんだ。
「とりあえず、この小物を出せばいいのかしら？」
「そうそう、それで出したら触媒と試薬がごちゃまぜになってるから分別して、触媒はそ

こに、試薬はそこにしまってくれ」
「ん」
ヴァイスの指示にイヴは声一つで承諾し、手際よく分別して言われた場所にしまっていった。
そんなイヴにヴァイスは驚きを隠せず魔術実験用の道具を整理がおぼつかなくなっていた。
（オイオイオイ、まじかよ!?　あのイヴがこんなに素直な姿なんて初めてみたぞオイ!?
……なにか心境の変化でもあったのだろうか？）
思い出したようにまた手を動かしながら現在のイヴの言動の原因を考えるヴァイス。
（……いやでもあいつのことだし、意外と恩を着せてなにかとんでもない命令とかしてきそうだもんなぁ……。アイツが理由無くこんな益の無い事するわけがない）
「手が止まっているわよ」
「どわぁ!?」
思考に意識を持っていかれていたため、背後にイヴが居たことに気付かず
声を掛けられ飛び上がるヴァイス。
「何よ、その反応。私がせっかく手伝ってあげているのに貴方は呑気に休憩中とは、良い御身分ね？」

「いや、あの、えと……悪い」
嫌味たっぷりのその言葉にヴァイスは歯切れ悪く謝罪した。
それを見てイヴはまた鼻を鳴らした。
「ふん……それで、言われたことは終わったけど、次は？」
「は、早いな。……じゃあ、そこの箱から適当に物を出しといてくれるか？」
「はいはい」
次の指示にも素直に従うイヴにヴァイスは冷や汗を掻く。
（もう深くは考えないようにしよう……）
結局、納得する答えは導き出せず、考えるのをやめたのだった。

†　†　†　†　†

自身の権限を使って与えたヴァイス邸（仮）への引っ越しの荷解きを手伝いに来たイヴ＝イグナイトは先程彼に指示された通りに目の前の箱達から小物などを床に出して種類ごとに纏めて整理していた。
魔術の研究に使うのであろう、注射器や受け皿に
錬金術に使う錬金釜や触媒、確実にヴァイスの趣味であろうサイフォンやポッドなど

を無造作に種類なぞお構いなしに入れているため、整理が面倒くさいことこの上ない。
特に触媒は、錬金術と白魔術と黒魔術それぞれ違っているにも関わらず
ごちゃ混ぜになっているため一苦労なのだ。
そんなヴァイスのいい加減さに少しため息が出るイヴ。
学院時代では魔術の実技、筆記ともに優秀な成績を修めていた人間とは思えない。
ほんのちょっぴり眉を顰めながら黙々と荷解きを進めていくイヴ。
そしてイヴはある物を見つけた。
（あら？　これは……写真？）
映っているのはヴァイスに似た銀髪の少女。
その少女はこちらに向かって花が咲いたような笑顔で見ている。
（妹かしら？　……結構昔の写真のようね、擦り切れてるし）
所々擦り切れたり、小さく破けたりしているその写真は大切そうに
写真立ての中に仕舞われていた。
それを見るに、持ち歩いていたが、何時頃かに写真立てに入れたように感じたイヴ。
（……ま、私には関係ないことだわね）
そう思ってまた手を付けていない荷物の紐を解いて整理を再開するのだった。

†　†　†　†　†

ヴァイスの引っ越しの荷解きはイヴの手伝いもあり、予定では日が沈むころに終わる予定だったものが日がまだ十分に上に位置する時間帯に終わることができた。
現在イヴの恐らく善意の手伝いのお礼、という理由で
ヴァイスらは帝都某所の喫茶店に居た。
その喫茶店は新しいヴァイスの家から徒歩十分前後と中々の近さで
ヴァイスの好みである落ち着いた雰囲気ということもあり
ヴァイスの心中ではここの常連になることは決定事項になっていた。
もちろん決定理由はそれだけでなく。
「……はぁ～、ここのコーヒーおいしいな」
コーヒーカップを置き、お茶請けの菓子を齧りながらヴァイスは
幸せそうにつぶやいた。
「私は紅茶の方が好きだから、コーヒーはあまり飲まないけど……まぁ、おいしいんじゃないかしら？」
イヴの口にもここのコーヒーは好評だったようだ。
その言葉にヴァイスは顔をさらに綻ばせた。

ここの喫茶店は穴場なのか自分達しかまだ客が存在していないようで
とても静かだ。
外の音がよく聞こえる。
風が窓を優しく叩く音。
雑談を交わす人々の喧騒。
通りを行き交う馬車の音。

その音を聞き流しながら、コーヒーカップを口に持っていき、傾けた。
音がいらぬ雑念も流してくれているような気がする。
ちらりとイヴを見やればイヴもイヴでリラックスしているようで目を瞑って
コーヒーを傾けている。
……ずっとこの時間が続けばいいのに。昔とは大違いだな。
ささやかな時間を強く、強く噛みしめながら明日の初仕事に備えて英気を養っていく
のだった。